

第2 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

2 各問題の出題意図と解答結果及び出題に対する反響・意見等についての見解

共通テスト第2回である令和4年度の問題の種類と各解答数、配点の内訳を【表1】に示す。200点満点は令和3年度問題と変わらない。全体の解答数については、他の外国語試験の令和3年度問題の解答数等を参考に、2つ削減して50とした。

第1問は発音問題であるが、Dに関しては、ピンインによる出題をリスニング問題の代替とする観点に基づき、ピンインによる会話問題を出題している。第2問は、令和3年度問題と同様である。第3問は、令和3年度問題と同様の形式だが、試験全体の解答数を見直したことから、同じ形式の解答数が最も多かった第3問Aを4問から3問に削減した。第4問は、共通テスト第1回から特に充実させた形式で、コミュニケーション能力を読み取り測定する問題である。中間Aでは、会話・表・グラフから情報を読み取った上で適切な選択肢を選ばせ、コミュニケーションにおける情報の受信力を測定できる問題とした。中間Bでは、地図・会話から情報を読み取り、それらを総合して発信することを想定して、適切な選択肢を選ばせ、コミュニケーションにおける情報の発信力を測定できる問題とした。第5問は長文問題で、従来の大学入試センター試験では2題出題していたものを、共通テストでは1題に集約し、長文読解力全般を測る問題としている。

【表1】

問題の種類	発音・ピンイン	語句	表現理解力	コミュニケーション力	長文読解
問題番号	第1問	第2問	第3問	第4問	第5問
解答数	9	8	10	12	11
配点	36点	32点	28点	52点	52点

第1問：発音の基礎及び正確さを確認する問題、正確なピンイン把握によるコミュニケーション力を確認する問題である。

音節の3つの要素（声母、韻母、声調）について問う出題及び正確なピンインの把握によるコミュニケーション力を問う出題となっている。中間AからDにわたって、日本の高等学校で初めて中国語を学ぶ生徒の語彙の習得範囲を考慮し、基本的な単語から出題した。科目全体の平均点と比べて、正答率は低めで、識別力のある問題となっている。高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）からは、提示されている語が常用される単語になっていて適切であるとの評価を得た一方、更にバラエティに富んだ選択肢を用意すべきではないかとの意見もあ

った。

Dについては昨年と同様、会話文、選択肢をピンインで出題した。中国語表記の補助手段としてピンインによる表記法を用いることは、中国語の4技能をバランスよく習得するために必要な手段であり、日本の高校における中国語教育では極めて重要である。教科担当教員からは、易しい単語を用いた展開のある会話をピンインで出題する形式は、ピンイン学習を重視する出題であるとして、評価を受けている。

A：声母に関する知識を問うもので、**1**は“sh”と“s”の区別、**2**はともに有気音“c”と無気音“z”の区別を問うもので、正確な発音の習得と知識が求められる。

B：韻母に関する知識を問うもので、**3**は“-uan”と“-ian”の区別、**4**は“-iu”と“-ou”の区別を問うた。

C：声調に関する知識を問う問題で、二音節語における声調の組合せを問うており、5つの二音節語、即ち10の音節に関して正確に把握していなければ正解は導けない。中国語を学ぶ初学者にとっては習得に苦勞するポイントであると同時に、相当中国語に習熟した者でも正確な知識をまま欠くことがある。正答率が比較的低く、識別力の高い問題となった。

D：ピンインの会話文によるコミュニケーション力を問う問題で、会話の流れを理解して解答する必要がある。

第2問：語彙力・表現力を測る問題である。

Aは文の一部をブランクとし、適切な語を選ばせる問題で、単語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。あわせて類義語の区別も問うた。**10**、**11**、**12**ともに正答率が高かった。特に成績上位層の識別に課題を残した。教科担当教員からは、選択肢が重要語であり、適切な問題であるとの評価を受けた。

BはAと同様に、語の意味・用法に対する正確な知識を問う問題である。適当でないものを選ばせることで難易度を上げており、いずれも識別力を備えた問いになった。教科担当教員からは、選択肢がいずれも重要語であり、語の用法の理解を見る適切な問題であると評価されている。

Cは、100～120字ほどの短文を読み、文脈に従って適切な語を選択させることによって、文脈に応じた語彙を選択する力を確認するものである。正答率が比較的高い問題となった。教科担当教員からは、基礎的な語句を使った表現の理解を見る適切な問題であるとの評価を受けた。

第3問：作文能力及びコミュニケーション力を測る問題である。

和文中訳及び中文和訳を通して、中国語の表現力、理解力を測る問題である。設問形式は昨年度と同じであるが、設問数を1問削減した。

A：日本語の文を読み、与えられた語句を正しく並べて対応する中国語の文を作る、和文中訳の設問である。8つの選択肢から必要な4つを選ぶ。いずれも正答率が高めで、特に問2**20**、**21**は識別力がやや低かった。教科担当教員からは、選択肢の語句はいずれも重要語の範囲で、語句の用法や文法の理解を確認する適切な問題であるとの評価を得た。

B：和文中訳問題で、選択肢の中国語はピンインで表記してあり、日本語の日常的な表現に対応する中国語の運用能力を測ろうとするものである。問1、2ともに日本語の表現を的確に理解した上で、ピンインで示された中国語の選択肢の全てを、それぞれ最後まで読み解かなければ正解が導けないように工夫した。問1**24**の正答率は高めだったが、問2**25**は、正答率が低めで識別力が高かった。

C：中文和訳で、問題文の中国語はピンインで表記してある。選択肢の日本語文を最後まで読み解かなければ正解できないように工夫した点は、上記Bと同様である。問1**26**、問2**27**ともに正答率が高く、識別力に課題を残した。

教科担当教員からは、第3問全体を通じて、高校で学習した文法事項や語法を活用、応用し、熟考することによって正答を導ける問題になっているとの評価を得た。

第4問：サークル活動や学習活動など、実際のコミュニケーションの場を具体的に設定して、身近な話題に関する資料から、必要な情報を読み取り、複数の情報を比較・判断して要点をつかむ力を問う問題である。言語情報处理的観点から必要な内容を整理・統合して正しい解答を得るようにしている。中間Aでは情報を受信する場面における中国語運用能力、中間Bでは情報を発信する場面における中国語運用能力を問う。

現実の生活に即した素材からの出題であるため、従来出題には使われなかった語彙もこの第4問に限り取り入れている。ただし、受験者にとって難度が高い語彙は避け、正答を導くのに必要な情報は適切な語彙レベルを維持するよう、配慮した。また、図表・グラフ・地図などを使って情報をスムーズに伝える工夫をしており、ここでそれらを用いるのは、そのような現実の生活の面における中国語の運用能力を問うことを主眼とするためである。

Aは日本人、イギリス人、インドネシア人、中国人、ベトナム人が参加する中国語サークルにおいて、メンバーがそれぞれ各国の名前の特徴を語り合い、更に調査するという設定になっている。5人のメンバーの会話、各国の名前についての調査結果やグラフデータなどから適切な情報を受信する能力を測る問題である。問1は、各国の名前の付け方に関する会話文の内容を的確につかみ、適当な説明を選ぶ問題である。問2は、冒頭の会話文及び調査結果をまとめた表を読み取り、表を完成させる問題である。問3は、冒頭の会話文、調査結果の表も踏まえて、中国、ベトナム、日本に多い名字のデータを示したグラフを読み取り、内容が一致する中国語の文を選ぶ問題である。様々な情報を得て、それらを処理し、適切な解答にたどり着く能力を測っている。中間Aの正答率は比較的低く、識別力を有しており、特に31は識別力が高かった。ただし、適当なものを2つ選ぶ問題では、片方が易くなる傾向があった。教科担当教員からは、国際社会を意識したメッセージ性のある問題との評価を得たが、一部の設問で出題形式に一考を要するとの意見があった。

Bは、ある市の150年前の地図と現在の地図を見比べながら、学生たちが市の進むべき方向性を検討し、プレゼンテーションを行う、という設定の問題である。地図、会話文、学生たちがまとめたポイントなどから適切な情報を受信した上で、それらの情報を概括して発信する能力を測る問題である。問1(1)(2)は、3人の学生が地図を見ながら語り合っている会話文に基づき、市の150年間の変化について問う中国語に対する適当な中国語の文を選ぶという問題である。問2は、住民アンケートの結果を参照しながら、学生たちが市の未来について語り合う会話文に基づいて出題されている。(1)はアンケート結果をまとめたスライドの空欄を補う問題である。(2)は討論においてある学生が他の学生に賛同しない理由を問う問題で、適当な日本語の文を選ぶ。(3)は、それぞれの学生たちの意見を取りまとめた部分の空欄に語句を補う問題である。36は、複数人の会話文を詳細に読み、論理展開を理解しなければ、正答が導き出せなかったためか、正答率が比較的低かった。これに対して、35、39は、正答率がかなり高く、成績下位層には識別力を有したものの、成績上位層の識別力は低かった。

教科担当委員からは、複合的な資料に基づく思考力を試す良問であるとの評価を受ける一方、解答が容易であったと思われる選択肢もあるとの意見が出された。

第5問：長文読解力を測ることを主たるねらいとしている。

今年度は評論文から選んだ。長文の分量は、長文問題としての適切な情報量に考慮して、前回の800字強から900字強に増やした。第5問の得点率を見ると、他の大問と比べて著しく低い値にはなっておらず、受験者に過剰な負担がかかったとは見受けられない。問題文は、使用語句、

表現などにも留意しながら、共通テストにふさわしい内容に書き換えている。素材や書き換えなどについても、教科担当教員から毎年提出されている要望を反映するよう努めている。

問題文は、世界最高レベルの囲碁の棋士がAIと対戦し、敗れた事例を通して、人間とAIの関係について論じたもの。問1、問4は、文中の下線部の解釈を日本語の選択肢から選ぶ問題である。問2は、文中の空欄に入れるのに適当な中国語の文を選ぶものである。問3は、長文中に現れる副詞“几乎”について、文脈に従って意味を判断し、5つの選択肢の中から同じ用法のものを選ぶ問題である。問5、問8は、文中の空欄に入れるのに適当な中国語の語句を選ぶものである。問6は文中の空欄に入れるのに適当でない中国語の語句を選ぶものである。問7は、文中の下線部の解釈を中国語の選択肢から選ぶ問題である。問9は下線部の内容を日本語の選択肢から選ぶものである。問10は、従来どおり、問題文全体の内容に合致する選択肢を選ぶ問題であった。

第5問全体を通しては、適当でないものを選ぶ45の正答率が5割台と最も低く、識別力が高かった。ついで論述の流れに即して副詞を置くべき位置を選ぶ42の正答率が7割程度にとどまった。同様に正答率が7割台であったのは46と48で、共に論述の流れを踏まえて下線部の意味内容を解釈する問題であり、受験者を熟考させる問題であったと言える。これに対して、文脈から適切な語句を選択する41、44は、正答率がかなり高かった。

教科担当教員からは、興味深い内容であり、人間の行動も描かれ、抽象的すぎず適切な問題であるとの評価を得た。

3 まとめと今後の課題

平均点は164.79点（200点満点）、100点満点換算で82.39点であり、最高点は200点、低点は25点、標準偏差は33.72であった。中国語は他の外国語と比べ平均点が高い傾向にあるが、中国語の受験者層の特性を考慮すれば、いたずらに平均点にまどわされることなく、高等学校の学習で到達した学力を正しく評価できる試験であるべきと思われる。教科担当教員からも、高等学校からの学習者が対応できるような問題作成を強く要望されている。本分科会の問題作成の方向性が平均点によって揺らぐことは、学習者にとって望ましくないと思われる。

平成19年度以降の16年間の受験者数及び平均点の変化は【図1】となる。本試験受験者は599人、追・再試験受験者は6人であり、合計605人であった。これは、昨年の639人から34人の減少となった。受験者数は、この3年間で667人、639人、605人と若干減少してきているが、共通テスト受験者数の推移を考えれば、ほぼ横ばいと言え、高校において中国語教育が着実に定着しつつあることの証左と見ることができよう。平均点はここ数年100点満点換算で80点程度の点数で推移している。来年度以降も、共通テストの目的に則して、基礎的な学力を身に付けた受験者が報われるような作問を心がけていきたい。

共通テスト2回目の結果として見た場合、シンプルな情報摂取、情報把握を問うだけにとどまらず、語学の本来の意義である読解力を問い続ける必要性がうかがわれる。

今年度も教科担当教員の方々をはじめ各方面から有益な意見を頂いたことに、深く感謝したい。こうした意見を参考にしながら、「高等学校における学習の成果が総合的・客観的に判断できる問題」の作成を通じて中国語教育の発展と充実に寄与していく所存である。

【図 1】

